

薬の副作用 心機能悪化

1/6

「ちょっと心配な数値が出ています。心臓の先生に診てもらいましょう」

だと分かった。

2021年2月、兵庫県立がんセンター(兵庫県明石市)の診察室。乳がん患者の岡田蘭子さん(68)は、主治医の言葉に驚いた。

前年10月に右乳房の全摘手術を受け、12月から3週間に1回、通院して再発予防の薬物治療を続けてきた。だが、血液や超音波の検査で、心機能の悪化がみられた。進行すると、治療を続けられなくなるおそれがあるという。

階段を上る際の息切れ以外は気になる症状はなかった。「がんなのに、なんで心臓なん？」と疑問を持ちながらも、同センター腫瘍循環器科を受診した。がん患者の心臓の検査や治療を専門的に担う診療科だ。

岡田さんは、同科部長の野中顕子さんの診察を受け、がん治療によって引き起こされた心臓病「がん治療関連心機能障害(CTRCD)」

診断は、がん治療前の心機能との比較が必要だ。岡田さんの場合、手がかりとなったのは、超音波検査の結果だ。心臓の収縮機能を示す数値「GLS」が、治療前と比べて38%低下していた。下がり幅が15%以上だと、明らかな症状がなくてもCTRCDとみなされる。

岡田さんが受けていた薬物治療は、「アントラサイクリン系」という古くから使われているタイプの抗がん剤と、「抗HER2薬」と呼ばれる分子標的薬。いずれも心臓に悪影響を及ぼす「心毒性」という副作用がある。

「がんの薬が心臓に悪さをして

いるかもしれません。治療を続けるため、心臓を守る薬も使いますよ」

岡田さんは、野中さんの提案を受け、心不全治療薬を毎日飲み始めた。薬物治療で通院した際は、野中さんの診察も受けた。血液検査などで心機能の低下が疑われた時は、飲み薬を増やして対応し、22年1月、計18回の薬物療法を終えた。

「肉親にがん患者が多く、再発がとも心配でした。心臓を診てもらいながら、薬物治療をやり遂げることができてほっとしています」と岡田さんは話す。

がん治療が進歩し、長期に生存する患者が増える中、治療の副作用や後遺症を防ぐ重要性が増している。心毒性への対応も大きな課題となっている。

ただ、野中さんのような腫瘍循環器科を専門とする医師はまだ少ない。がん患者の心機能をチェックする医療機関も限られる。日本腫瘍循環器学会は今年度、診療体制の全国調査を始めた。同学会理事長で神戸大腫瘍・血液内科教授の南博信さんは「高齢のがん患者が増え、心疾患を持ちながらがん治療をする人もいる。がん心臓病を同時に診る体制づくりが求められている」と指摘する。

愛犬を抱く岡田さん。乳がんの治療は一段落したが、心不全治療薬は今も服用する(兵庫県内)



医療ルネサンス

No.8297

がん患者と心臓

岡田さんは、同科部長の野中顕子さんの診察を受け、がん治療によって引き起こされた心臓病「がん治療関連心機能障害(CTRCD)」

(このシリーズは全6回)